

聖書から見た欧米型キリスト教Ⅱ

第1回 教会制度の歴史と聖書的モデルの違い

※本シリーズでいう「欧米型キリスト教」とは、近代以降の欧米社会において形成された神学的・制度的・文化的キリスト教を指します。

1. 序：私たちが知る"教会"はどこまで聖書的なのか

現代の多くの教会は、司祭・牧師・神父といった聖職者、礼拝堂、組織制度、教会法や役員会などを備えた"制度としての教会"を当たり前のものとして受け止めています。

しかし、こうした制度は、聖書そのものに由来する部分と、歴史の中で後から形成された部分が混在しています。

本稿の目的は、制度を否定することではありません。むしろ、「制度がどこまで歴史の産物で、どこまで聖書の本質を表しているか」を丁寧に見極めることで、現代の教会がより聖書本来の姿に近づく道を探ることにあります。

2. 新約聖書に見る"教会"—制度ではなく関係と生活に根ざした共同体

新約聖書が描く教会（エクレシア）は、建物でも制度でもなく、神に召し出された人々の共同体でした。

最初期の教会は、家庭を中心として集まり、日常生活を共有し、祈り、食卓を囲んでいました。

そして一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈をしていた。（使徒2章42節）

ここにある教会の姿は、序列ではなく交わり、法制度ではなく生活共同体、権威構造ではなく、賜物の相互性に特徴づけられています。

またパウロは、教会を「キリストのからだ」（コリントI 12章27節）と呼びました。

これは、教会を有機的・生命的な存在として描いた言葉であり、静的組織ではなく、互いが補い合う身体としての関係性を示しています。

この"聖書的教会モデル"は、後に形成されていく制度化された教会とは異なるものです。

3. 制度化の始まりーローマ帝国と教会の結合

教会制度の大きな転換点は、コンスタンティヌス帝による 313 年のミラノ勅令でのキリスト教公認です。

さらに 380 年にはテオドシウス帝がキリスト教を国教と定め、ここから教会は帝国の一部となり、行政の制度と融合していきました。

(1) 階層的組織の導入

ローマ帝国は、総督、軍司令官、官僚による明確な階層構造を持っていました。教会も次第に同じような階層化を進めます。

司教（ビショップ）

司祭（プリースト）

助祭・執事（ディアコノス）

これらの役職は、新約聖書にもその原型がみられますが、帝国化以降は行政職としての要素が格段に強まりました。

(2) 建築様式と聖所化

また、ローマの公共広場（バシリカ）建築が教会建築のモデルとなり、"聖所と俗所"という概念が明確に区別されるようになりました。

しかし新約時代の信徒たちは、建物を神の家として特別視しませんでした。神殿中心主義からの脱却が福音の重要な要素だったからです。

「あなたがたは神の宮」（コリント I 3 章 16 節）とパウロが語ったように、本来の神の宮は建物ではなく、人そのものでした。

(3) 教会法（カノン法）の整備

帝国と一体化した教会は、広大な領土を統治するため、明確な法体系を発展させます。

この法文化は、正統・異端の境界を明確にする役割を果たす一方、制度を守ることが信仰の中心であるかのような構造も生み出していきました。

4. 中世以降の制度教会—組織そのものが信仰になる構造

中世の教会はヨーロッパ全体の権威となり、政治・経済とも密接に結びつきました。

その結果、教会は次第に神の共同体よりも、地上の巨大組織として機能する面を強めていきます。

教皇の絶対的権威や司教の領地支配、聖職者と一般信徒の分離、聖餐と赦しを管理する権威の集中など、これらは新約聖書の教会像とは大きくかけ離れています。

イエスは、「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない」（マタイ20章26～27節）と語られました。

しかし、中世の制度教会は、仕えるよりも支配する構造へと傾いていきました。

宗教改革もこの構造を批判しましたが、プロテスタントもまた、別の形で制度化を進め、教会制度そのものから完全には自由になれませんでした。

たとえば、カルヴァン主義が形成した長老制度や信仰告白体系も、時代を経るにつれ、制度の自己目的化という問題を免れませんでした。

5. 聖書的モデルへの回帰—有機的共同体としての教会

聖書が描く教会モデルは、一言で言えば、制度ではなく、関係によって成立する共同体です。

このモデルにはいくつかの主要な特徴があります。たとえば、教会とは、互いの賜物が自由に働く場所です。

預言、教え、奉仕、励まし、癒やし、知恵といった賜物が、上からの許可ではなく、聖霊の働きによって自然に立ち上がるものとして描かれています。

また、指導者は支配者ではなく、群れを守る牧者として理解され、権威は地位ではなく人格と奉仕によって成り立ちます。

さらに、信仰は建物中心ではなく、生活共同体の中で生きるもので、食卓・祈り・労働・交わりの中で育っていきます。これが聖書的な教会の姿です。

6. 制度を否定するのではなく、制度を越えることが求められる

今日の教会が制度を持つこと自体は問題ではありません。むしろ制度は、共同体を守り、教育と礼拝の安定をもたらすための重要な器です。

しかし制度が目的化し、制度そのものが教会の正体になってしまうとき、聖書

の描く共同体の生命が失われます。

イエスが築いたのは、制度ではなく、人々の関係そのものから立ち上がる共同体でした。

人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである。（マルコ 10 章 45 節）

教会制度の歴史を正しく理解しつつ、その上で聖書本来の关系的・有機的共同体を回復していくことこそ、現代の教会に求められている課題です。

制度を壊すのではなく、制度を透明化し、その背後にある聖書の本質が見えるようにする。それが、脱西洋化神学にもつながる聖書回帰の一步ではないでしょうか。

第2回 現代のプロテスタント神学に残る近代合理主義の影響

1. プロテスタントは聖書中心でありながら、なぜ合理主義に傾いたのか

プロテスタントは、宗教改革以来、「聖書のみ」を原則として掲げてきました。

しかし、現代のプロテスタント神学を丁寧に観察すると、その多くが近代合理主義（modern rationalism）の影響を強く受けていることが分かります。

合理主義の特徴は、可視化できるもの、理論的に説明できるもの、合理的に整合性が保てるものを重視し、逆に、象徴、共同体、霊性、歴史の意味といった、聖書の中心要素を軽視する傾向を持っています。

その結果、プロテスタントは聖書の言葉を尊重しながらも、聖書が本来語ろうとしている意味や世界観を、そのまま受け取ることが難しくなっている場合があります。

たとえば、聖書が語る「神の国」を、死後に行く天国のことだと理解し、現実の社会や人間関係とは切り離して捉えてしまうことがあります。

また、信仰を日曜日の礼拝や個人の内面に限定し、日常生活の中で生きられるものとして捉えにくくなっている場合もあります。

本稿では、この構造的問題を明らかにし、聖書そのものに立ち返る視点を示していきます。

2. 宗教改革の理性化がもたらしたもの—信仰の合理的説明への偏り

ルターとカルヴァンは、明らかに聖書への回帰を目指しました。しかし彼らが活動した16世紀ヨーロッパは、すでに中世スコラ学と合理主義が融合した文化の中にありました。

そのため宗教改革は、教会の腐敗を批判しつつも、信仰を合理的に説明する方向へと自然に傾いていきます。

ルターは「信仰による義人は生きるであろう」（ロマ書1章17節）の言葉を信仰義認の根拠として強調しましたが、後代の神学者たちは、これを体系化し、論理化し、理論として整えました。

その過程で、信仰はしばしば「心の内的確信」であり、「論理的整合性を持つ

教義」として理解されるようになります。

これは一面では重要ですが、その一方で、聖書が語る歴史的・社会的な広がりや、関係の回復としての救いという視点が見えにくくなっていきました。

3. 近代合理主義がプロテスタント神学に組み込まれた過程

デカルト以降、人間の理性を基準とする考え方が広まり、信仰もまた理性的に説明できるものでなければならぬと考えられるようになりました。

プロテスタント神学もこの流れに巻き込まれます。ここで生じたのは次のような現象でした。

まず、奇跡や霊の働き、象徴的な表現は非合理的なものとして扱われ、聖書解釈は歴史批評や文献批判、構造分析へと進みます。

これらの手法は聖書の歴史的・文脈的理解を深める学問的貢献をもたらしましたが、一方で、聖書を分析の対象として客体化することで、信仰の霊的現実を読者が直接受け取る力を弱めてしまう面もありました。

さらに、19世紀後半になると、信仰はしだいに道徳や倫理を教えるものとして理解されるようになります。

これは、神が歴史の中で働くという聖書の視点を弱め、信仰が理性の枠内に収まるものとして理解される方向へと進みました。

この合理主義的信仰理解は、現代のプロテスタント教会にまで影響しています。

4. 合理主義がもたらす聖書の象徴・霊性・歴史性の喪失

合理主義は信仰を説明しやすくしますが、その代償として、聖書が持つ豊かな多層性を削り取ってしまいます。

(1) 象徴の喪失

イエスのたとえ話、旧約の詩篇、祭儀や預言は象徴に満ちていますが、合理主義は象徴や比喻を曖昧として扱います。

そのため、聖書の詩的・象徴的豊かさが十分に理解されないまま、解釈が平坦化されてしまいます。

(2) 霊性（スピリチュアリティ）の弱体化

聖霊の働き、祈りの深さ、内的照明などは合理的説明に適さないため、軽視さ

れがちです。

しかし聖書は、「神は霊である」（ヨハネ4章24節）と語り、神との関係は形式ではなく、霊とまことにおいて結ばれるものであることを示しています。

ところが合理主義は、この中心的な領域を重視しなくなる傾向を生み出しました。

（3）歴史の意味の喪失

聖書において歴史は神が働く舞台です。「時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった」（ガラテヤ4章4節）という言葉が示すように、歴史には神の意図が流れています。

しかし近代合理主義は、歴史を因果の連鎖として説明し、神の目的性を排除します。

その結果、神の国の到来という聖書の中心テーマが、来世の象徴として弱体化され、現実世界における神の働きが見えにくくなっていきました。

5. 合理主義の影響を越えて聖書に回帰する道

では、現代のプロテスタント教会は、どのように合理主義の呪縛を超えることができるのでしょうか。

まず必要なのは、聖書を単なる教義の根拠として読むのではなく、聖書が描く世界を、歴史・象徴・共同体・霊性・身体が一体となったものとして受け取る姿勢です。

信仰は論理だけでは完結しません。イエスは論理体系を説いたのではなく、物語を語り、病を癒やし、人に触れ、食卓を囲み、共同体をつくりました。これは、合理主義では説明しきれない生ける神の働きです。

また、聖書には合理的説明を超えた領域が多くありますが、それらは信仰の本質を弱めるどころか、むしろ深める力を持っています。

霊的現実、象徴の深さ、歴史の意味、人と人の関係の復帰—これらは合理的説明を越えた場所で動きます。

合理主義を克服するとは、非合理に陥ることではなく、合理主義という狭い枠に閉じ込められていた聖書を、歴史・共同体・象徴・霊性を含む本来の文脈へと取り戻すことです。

6. プロテスタント神学は第二の宗教改革を迎えつつある

21世紀のプロテスタント神学は、すでに大きな転換期にあります。

アフリカ、アジア、南米の教会は、合理主義よりも共同体性・靈性・象徴を重視し、聖書をより全体的に理解しようとしています。

たとえば、ナイジェリアやブラジルのペンテコステ系教会に見られる予言・癒やし・賜物の実践、あるいは韓国の早天祈祷会に代表される共同体的祈りの文化は、こうした傾向の具体的な表れと言えます。

この潮流は、欧米型神学の枠組みを超えて、聖書本来の物語性と靈性を再発見する第二の宗教改革とも呼べる動きです。

イエスは「真理は、あなたがたに自由を得させる」（ヨハネ8章32節）と言われました。

この真理は、合理的説明だけで理解できるものではなく、神の働きそのものに触れる経験を通して、自ずと理解されていくものです。

合理主義を超え、歴史・共同体・象徴・靈性・身体を含む聖書の全体的な世界観を取り戻すとき、プロテスタントの信仰は、より豊かに、より力強く、より歴史の中で生きるものとして甦ります。

これこそ現代の教会が進むべき新しい道ではないでしょうか。

第3回 アジアから始まる第二の宗教改革の可能性

序：なぜ第二の宗教改革なのか

16世紀の宗教改革は、欧州の教会制度や神学体系を刷新し、聖書回帰を促した偉大な歴史的出来事でした。

しかし、宗教改革もまた、ヨーロッパ内部の思想と文化の制約を受けた改革であることを私たちは見てきました。

そのため、現代の世界的視野からキリスト教を眺めると、次のような問いが浮かびます。

「欧米文化を前提としない、新しい聖書回帰は可能だろうか？」

この問いに対して、最も有力な可能性を持っているのがアジアです。

アジアは、欧米とは異なる価値観—関係性、共同体性、身体性、歴史意識—を持ち、聖書の根本的世界観と共鳴する文化的素地を備えています。

本稿では、アジアがなぜ第二の宗教改革の中心地となり得るのか、その神学的・歴史的背景を探りたいと思います。

1. アジア文化は聖書の核心と自然に共鳴する

アジアの文化的特徴は、西洋近代文化とは異なり、聖書の世界観に驚くほど近い領域を持っています。

まず、人間存在を関係の中にあるものとして理解します。家族、血統、先祖、共同体といった価値観は、旧約聖書が描く契約的・家系的世界観とよく一致しています。

次に、身体性と生活性を重視します。例えば、儒教の「身を修める」という伝統は、個人の内面的修養が家族や社会秩序へとつながるという思想です。

また仏教の生活倫理は、欲望や執着からの解放を目指しながら、日常の行為そのものを修行として位置づける姿勢を重んじます。

そして道教の身体実践は、身体を通して宇宙の秩序と調和しようとする営みです。

こうした考え方は、いずれも霊と身体、信仰と生活を分離しないという点で、ヘブライ的な全体性と自然に共鳴します。

また、アジア文化は象徴や物語を重んじるため、詩篇に見られる詩的表現や、たとえ話、祭儀、預言といった象徴的な表現様式を理解しやすい素地を持ってい

ます。

最後に、アジアは強い歴史意識を持ち、民族や文明を貫く長期的な物語を重視します。

これは救済史という聖書の最も重要な枠組みを受け止める能力につながります。

こうした文化的特質が組み合わさるとき、アジアは欧米型キリスト教には見えにくかった聖書の深層構造を、直感的に理解できる可能性を持ちます。もちろんアジアは多様であり、これらの思想がすべてのアジア文化を代表するわけではありませんが、少なくとも東アジア圏において共有されてきた価値観として、聖書的世界観との共鳴を探ることができます。

2. 欧米の教会が直面する限界

21世紀の欧米教会は深刻な問題に直面しています。教会離れ、信仰の個人化、共同体の崩壊、合理主義の限界など、かつての宗教改革や近代神学が生み出した枠組みそのものが、現代社会の変化に対応しきれなくなっています。

欧米型キリスト教は、長く「個人救済」「合理的教義」「制度的教会」を前提としてきましたが、これらは本来、聖書が持つ多層的世界観とは異なる方向に形成されてきたものでした。

そのため欧米では、教義の硬直化、教会組織の弱体化、信仰の私的領域化、歴史意識の欠如といった問題が深刻化しています。

これに対してアジアでは、逆に信仰共同体の生き生きとした成長が見られ、教会の重心が西から東へ移りつつある現象すら観察できます。

たとえば、韓国では、教会が社会的・霊的な共同体として大きな役割を果たし、世界有数の規模を誇る教会が多数存在するとともに、早天祈祷会や旧正月の断食祈祷など、信仰が生活の時間感覚と結びついた実践が広く根づいています。

中国では、共産主義体制下で国家による宗教統制が行われる中でも、家庭教会が形成され、制度よりも関係性を基盤とした信仰が生活の中で継承されてきました。

こうした動きは、信仰が制度ではなく、生きた関係として受け取られていることを示しています。

3. アジアから見た聖書回帰の方向性

アジアにおける第二の宗教改革の核心は、聖書の多層性を回復することにあります。

ただし、それは欧米型神学に対抗するものではなく、聖書の声をより豊かに受け取るための文化的な助けとなるものです。

(1) 関係的世界観の回復

聖書は、神と人、人と人の関係の回復を中心テーマとしています。「人がひとりであるのは良くない」(創世記2章18節)という言葉は、存在の本質が関係にあることを示します。アジアの文化はこれを自然に理解できます。

(2) 共同体としての教会の再発見

使徒行伝に描かれる教会は生活共同体であり、制度ではありません。アジアの文化は共同体性を重んじ、家族単位で信仰を継承しやすい土壌を持っています。

(3) 歴史における意味の回復

聖書は神が歴史を導く物語ですが、近代合理主義はこの視点を弱めてきました。一方、アジアの諸文化は長い歴史意識を持ち、救済史という視野を受け止めやすい土壌を備えています。

(4) 象徴・詩・物語の深さへの理解

聖書が多くを象徴で語るのは、靈的真理が単純な言葉や理屈では言い表せないからです。アジア文化は象徴言語に慣れ、物語的真理に共鳴しやすい特性があります。

これらの特徴を踏まえると、アジアからの聖書解釈は、欧米的な枠組みでは捉えきれなかった聖書の意味を、より豊かに理解する手がかりを与えてくれます。

4. アジアに与えられた靈的・歴史的役割

世界のキリスト教人口は、すでに南半球・アジアへと移行しつつあります。

これは単なる人口動態ではなく、神学的・靈的意味を持つ現象と捉えることができます。

アジアは、関係性と共同体性、身体性と生活実践、歴史意識と象徴を大切にす文化を持ち、聖書の根本原理と自然に調和します。

そのためアジアからは、欧米型神学が見落としてきた要素を補完し、聖書の原点へ回帰する新しい読み方が提案できる独自の立場が生まれます。

これは、欧米神学を超える、欧米文化を脱ぎ去る、聖書そのものに立ち返るという形の第二の宗教改革と言える流れです。イエスは言われました。

御国がきますように。みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように。（マタイ6章10節）

この祈りは、文化を越えた神の国の実現を求めるものであり、アジア的な感性の中に深く響くテーマでもあります。

5. アジアから始まる新しい時代

アジアの文化は、聖書の中心的な世界観と共鳴する力を持っています。

そこから生まれる新しい神学的潮流は、個人主義から関係へ、内面中心主義から身体と生活へ、合理主義から象徴と霊性へ、来世中心主義から歴史への関与へという方向で、世界のキリスト教を新しい段階へ導く可能性を持っています。

これは単にアジアが主導権を握るという意味ではありません。むしろ、アジアの文化的特質が、文化的色づけを意識しながらも、聖書本来の声をより鮮明に映し出す器になり得るということです。

どの文化も完全な透明性を持つことはできませんが、アジアの特質が欧米型神学の限界を補完する一方の視点を与えてくれることは確かです。

欧米型キリスト教を越え、文化を越え、聖書そのものへ回帰する。その道を先に歩む役割が、アジアには与えられているのではないのでしょうか。

これこそが、アジアから始まる第二の宗教改革の可能性であり、世界的視野に立ったときに見えてくる神学的希望の方向性です。

第4回 なぜ今、欧米で日本文化が注目されているのか

1. 欧米に広がる日本文化ブームの背景

近年、欧米社会で、日本文化への関心がかつてないほど高まっています。

日本政府観光局の統計によれば、コロナ禍後の訪日外国人数は急速に回復し、欧米からの訪問者による「文化体験」目的の来訪が著しく増加しています。

また、Netflix等の動画配信プラットフォームにおけるアニメ視聴数の急増も、この動きを象徴しています。

アニメやマンガ、和食、禅、ミニマリズムといった文化的要素が広く受容されるようになり、それは一時的な流行というよりも、価値観の転換を伴う現象として定着しつつあります。

この動きは単なる娯乐的消費を超え、近代西欧社会が長らく前提としてきた世界観そのものに対する問いかけを内包しているように見えます。

近代西欧文明は、合理性、効率性、進歩、成果といった概念を中心に発展してきました。

それは科学技術や制度の面では大きな成功をもたらしましたが、同時に、人間の内面や共同体的つながり、存在の意味といった領域を後回しにしてきました。

その結果、物質的には豊かでありながら、精神的には疲弊した社会が生まれています。

こうした状況の中で、日本文化が示す「別の生き方」が注目を集めているのは偶然ではありません。

それは、西欧社会が自らの限界を自覚し始めた地点で、別の可能性を模索していることの表れでもあるのです。

2. 表層的ブームを超えて—アニメ・禅・和食・ミニマリズムの背後にあるもの

日本文化への関心は、しばしばアニメや和食、禅やミニマリズムといった具体的な形で表れます。

しかし重要なのは、これらが単なる様式美や娯楽として消費されているのではなく、その背後にある価値観や、人間が社会や自然とどのような関係の中で生きるかという感覚そのものが注目されている点です。

たとえば、禅の簡素さや「間」の感覚、和食に見られる素材への敬意、アニメ

に描かれる人間関係の繊細さなどは、効率や成果を最優先する価値観とは異なる、人と人、人と自然との関係を重んじる生の捉え方を前提としています。

そこでは「速さ」や「成果」よりも、「調和」や「持続」、「関係性」が重んじられます。

このような感覚は、現代社会において失われつつある「生きる実感」を回復するものとして受け止められています。

日本文化への関心とは、実は表層的な趣味の問題ではなく、近代的価値観への深い疲労と、その先にある別の生の可能性を模索する動きなのです。

3. 近代西歐的価値観の限界—成果主義・合理主義・自己中心性の疲弊

近代西歐社会は、人間を合理的主体として捉え、世界を管理・支配可能な対象として理解してきました。

その結果、社会制度は効率化され、個人は成果によって評価されるようになります。

しかしこの枠組みは、人間を常に成果や結果を求められる存在として捉え、休息や無償性、他者との関係といった側面を、社会の中心的な価値から外してきました。

信仰もまた、その影響を免れませんでした。本来は生活全体を貫くものであった信仰が、個人の内面の問題へと押し込められ、公共性や社会性を失ってしまいました。

その結果、信仰は人生を支える力というより、私的な価値観の一つへと縮減されていったのです。

こうした状況が、現代人に深い疲労感と空虚さをもたらしていることは否定できません。

4. 日本文化が持つ「関係性の感覚」—間・空気・型・調和・場の倫理

これに対して日本文化は、人間を孤立した主体としてではなく、関係の中に生きる存在として捉えてきました。

家族、地域、自然、さらには目に見えない存在との関係の中で、人は自己を形成していくと考えられてきたのです。

「間」や「空気」を読む感性、「型」を通して身につく生き方、「場」を乱さない倫理は、個人を抑圧するものではなく、関係性の中で自己を調律する知恵と

して機能してきました。

これは、人間を孤立した主体として捉える近代的な考え方とは大きく異なります。

5. 聖書的世界観との意外な共鳴—共同体・身体性・日常性という視点

このような日本文化の感覚は、聖書の世界観と深い共鳴を示します。

聖書において人間は、神との関係、他者との関係、被造世界との関係の中で生きる存在として描かれています。

そして、信仰は内面の思想ではなく、生き方として現れるものです。ミカ書6章8節はそれを象徴する聖句です。

人よ、彼はさきによい事のなんであるかをあなたに告げられた。主のあなたに求められることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか。（ミカ書6章8節）

また、「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい」（ロマ12章1節）という聖句は、信仰が身体と日常生活を含む全体的な営みであることを示しています。

6. 欧米社会が無意識に求めているもの—信仰が生活の中で具体化される感覚の回復

以上を踏まえると、欧米社会で日本文化が強い関心を集めている現象は、単なる異文化趣味や一時的流行として理解することはできません。

その背景には、信仰が理念や内面の問題に閉じ込められ、生活や社会との結びつきを失ってきた近代的あり方への、深い違和感があるように思われます。

日本社会において見られる、人と人との距離感、日常の所作への配慮、自然や環境との調和を重んじる感覚は、宗教的言語によって説明されることは少ないものの、結果として、生き方そのものの中に価値や意味が宿るという感覚を今なお保っています。

そこでは、信仰や倫理が抽象的理念としてではなく、日常の振る舞いや関係のあり方として具体化されています。

この点において、日本社会の在り方は、聖書が語る信仰理解——すなわち、信仰が生活と切り離されず、身体や関係、共同体の中で形を取るという理解——と、思いがけない重なりを見せています。

欧米の人々が日本を訪れて深い安らぎや魅力を感じ、再訪を望んだり、時には

母国に戻りがたいと感じたりする体験の背後には、必ずしも言語化されてはいないものの、西欧社会よりも日本社会の方が、イエスの福音が志向する関係性や生の秩序を、より具体的に体感できると直感している可能性も考えられます。

しかも興味深いのは、日本がキリスト教信者人口の少ない国であるにもかかわらず、欧米の訪問者がイエスの福音が志向するような関係性や生の秩序を体感するという逆説的な経験が生じている点です。

この事実は、イエスの福音が欧米型キリスト教という文化的・制度的枠組みによって完全に表現し尽くされるものではなく、むしろ、より次元の高い、人類普遍の生の原理として働き得るものであることを、逆説的に示しているのではないのでしょうか。

日本文化への関心の高まりは、日本が特別であることを誇示するための材料ではありません。

それは、福音が特定の宗教文化を超えて、人間の生と社会に関わる普遍的な力を持つことを、現代世界があらためて感じ取り始めている兆しとも言えるでしょう。

第5回 共産主義体制下で育まれた中国家庭教会の信仰

1. 宗教は迫害下で発展するという逆説

中国におけるキリスト教の歩みは、現代宗教史の中でも、きわめて特異な位置を占めています。

共産主義体制のもとで宗教は国家によって厳しく管理され、時に排除の対象にもなってきました。

それにもかかわらず、中国ではキリスト教徒の数が増え続けてきたと推定されています。

この事実は、宗教は抑圧されれば衰退するという一般的な理解に対して、根本的な問いを投げかけています。

なぜ宗教は抑圧の中で発展したのでしょうか。この問いに向き合うとき、私たちは「教会とは何か」「信仰とは何によって支えられるのか」という根本的な問題に立ち返ることになります。

2. 制度なき信仰共同体—「家庭教会」の特徴と広がり

中国におけるキリスト教の多くは、国家公認の宗教組織ではなく、いわゆる「家庭教会」と呼ばれる形態を取っています。

「家庭教会」とは、教会堂や正式な制度を持たず、家庭や小規模な集まりを中心として形成される信仰共同体です。

そこでは、聖職者と信徒という明確な階層構造は必ずしも存在せず、信仰は生活の中で共有され、支え合いながら育まれます。

礼拝は家庭の一室で行われ、祈りや聖書の朗読は、日常生活と分かちがたく結びついています。

制度的には不安定でありながらも、この形態は極めて柔軟であり、状況の変化に適応する力を持っています。

国家による規制や弾圧が強まるほど、信仰はより深く人々の生活に根を下ろしていきました。

ただし2018年以降、規制がさらに強化されており、家庭教会をめぐる状況は厳しさを増しています。それでもなお、信仰共同体が生き続けているという事実は、その柔軟性と生命力を示しています。

3. 組織より関係、教義より生—生活の中で生きる信仰

「家庭教会」において、信仰は知識として教え込まれるものではありません。むしろ、日常の生活の中で体験され、共有され、体得されていくものです。

信仰が「理解するもの」というよりも、「生きるもの」として存在しているのです。

そこでは、教義的な正確さよりも、互いを思いやり、支え合う関係性が重んじられます。

困難の中で祈り合い、物質的にも精神的にも助け合うことが、信仰の具体的な表現となります。

この姿は、使徒行伝の2章に描かれている初代教会の姿を想起させます。

信者たちはみな一緒にいて、いっさいの物を共有にし、資産や持ち物を売っては、必要に応じてみんなの者に分け与えた。そして日々心を一つにして、絶えず宮もうでをなし、家ではパンをさき、よろこびと、まごころとをもって、食事を共にし、神をさんびし、すべての人に好意を持たれていた。そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである。（使徒行伝2章44～47節）

4. 迫害が信仰を純化—形式より実存が問われる状況

中国のキリスト者にとって、信仰を持つことは社会的な利益をもたらすものではありません。

場合によっては、監視や差別、職業的制限などの不利益を伴います。

それでも信仰が守られ続けてきたのは、それが単なる宗教的所属ではなく、生き方そのものとして受け取られていたからです。

この状況において、信仰は「選ばれるもの」になります。形式的に属することは意味を持たず、信じることそのものが覚悟を伴う選択となります。ここに信仰の純化を見ることができるとのことです。

「人間に従うよりは、神に従うべきである。」（使徒行伝5章29節）という言葉は、まさにこの状況を言い表しています。

信仰は制度に従属するものではなく、良心と真理に従う生き方として現れます。

5. 聖書的信仰との共鳴—初代教会との構造的類似

「家庭教会」のあり方は、初代教会の姿と多くの共通点を持っています。

制度や建物よりも人のつながりが重視され、信仰は生活の中で育まれました。そこでは、信仰と生活が分断されることはありません。

初代教会においても、信仰は社会的に保証されたものではなく、しばしば迫害の中で保たれてきました。しかし、そのような状況こそが、信仰の本質を明確にしました。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」（ヨハネ福音書 12 章 24 節）という言葉は、迫害の中で成長してきた中国の「家庭教会」の歩みを象徴的に表しています。

6. 現代世界への問いかけ—「強さ」とは何か、「教会」とは何か

中国の「家庭教会」の存在は、現代世界に根本的な問いを投げかけています。

教会とは建物や制度なのか、それとも人と人との関係そのものなのか。

信仰の強さとは、社会的影響力の大きさなのか、それとも困難の中でも失われない生き方なのか。

「家庭教会」の歩みは、信仰の本質が制度や権威にではなく、日々の生活と関係の中に宿ることを示しています。

それは、現代社会が見失いがちな、生活の中で実際に体現されている信仰の姿を、静かに、しかし力強く示しています。

この視点は、中国という特殊な状況にとどまらず、現代世界全体に対する問いとして受け取ることができるでしょう。

信仰とは何か、教会とは何かという根源的な問いに対して、「家庭教会」の中にこそ、一つの答えがあると言えるでしょう。

第6回 神の国は「関係のただ中」に現れる

1. 「神の国は、実にあなたがたのただ中にある」という言葉の意味

ルカによる福音書 17 章 20～21 節で、イエスは「神の国は、見られるかたちで来るものではない。また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」と語られました。

この「あなたがたのただ中にある」という表現は、しばしば「心の中にある」と内面化して解釈されてきました。

しかし、ギリシア語原文の ἐν τῷ ὑμῶν (エントス・ヒュモーン) は、主要な意味として「内面に」と訳されることが多いですが、「あなたがたのただ中に」「あなたがたの間に」という意味で理解する解釈も有力な学説として存在します。

しかも、この言葉はパリサイ人に向かって語られており、イエスが、神の国が彼らの「心の中」にあると言っていると考えるのは無理があります。

むしろ、神の支配はすでに彼らの集団のただ中に現れている、という意味に理解する方が、文脈的にも自然です。

ここで重要なのは、神の国が個人の内面の状態ではなく、人と人との関係の場に現れる秩序であるという視点です。

2. 「二人または三人のただ中に」一臨在は集まりの中にある

この理解をはっきり裏づけるのが、マタイによる福音書 18 章 20 節の「二人または三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」という言葉です。

ここでイエスは、ご自分の臨在が個人の内面ではなく、人と人が集う関係の場に現れることを明確に語っておられます。

教会とは建物や制度を指すのではなく、キリストの名において結ばれた関係そのものを意味するのです。この理解は、中国の家庭教会や初代教会の家における集会とも重なります。

制度や権威がなくても、関係のただ中にキリストは臨在されるという考え方は、きわめて聖書的な教会理解と言えるでしょう。

3. 律法の中心は「神への愛」と「隣人への愛」

イエスは、律法の中心を次の二つに要約され、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」（マタイ福音書 22 章 37～40 節）と言われました。

ここで明らかなのは、聖書信仰の中心が、神との関係と人との関係の在り方に置かれているという事実です。

信仰とは単なる内面の確信ではなく、関係の中で具体的に形を取る生き方そのものだということが、ここではっきりと示されています。

4. 愛の極致は「友のために自分の命を捨てること」

さらにイエスは、愛の完成形について「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」（ヨハネ福音書 15 章 13 節）と語られました。

ここで示されている愛は、感情や理念ではなく、関係の中で自分を与える行為としての愛です。

愛は抽象的な概念ではなく、人と人との関係の中でのみ現実のものとなります。

そして、その究極の姿が、自己を差し出すことにあるのだと、イエスは語られたのです。

5. 聖書に見る信仰の一貫した構造

ここまで見てきた聖句は、すべて同じ方向を指し示しています。

ルカ 17 章が語る神の国の「ただ中」への到来、マタイ 18 章 20 節が語るキリストの臨在が「集まりの場」に現れること、マタイ 22 章 37～40 節が示す律法の核心が「神と隣人との関係」にあること、そしてヨハネ 15 章 13 節が指し示す愛の完成が「関係の中で自分を与えること」にあること——これらすべての聖句は、同じ方向を指し示しています。

つまり、聖書の信仰は一貫して、個人の内面ではなく、関係と共同体の中に現れる信仰として描かれているのです。

6. 欧米型キリスト教が見失いやすかったもの

近代の欧米型キリスト教は、信仰を内面の確信の問題として捉え、救いを魂の問題に縮小し、教会を制度として組織化する方向へと進んできました。

その結果、聖書が本来持っている関係的・共同体的・歴史的な構造が、次第に見えにくくなっていきました。

今回のシリーズで扱ってきた日本文化に残る関係の倫理や、中国の家庭教会に見られる生活の中の信仰は、まさにこの聖書本来の構造への回帰として位置づけることができます。

7. 神の国は「生き方のただ中」に現れる

神の国とは、死後に行く場所でも、個人の内面に閉じた安心状態でもありません。

それは、人と人との関係、共同体のあり方、日々の生き方のただ中に現れる神の秩序です。

そしてそれは、イエスご自身が人々のただ中に立ち、互いに愛し合うことを教え、命を与える生を実際に生きられた、その生そのものによって示された現実だったのです。